

Cancer Conference

静岡がん会議 2003

県民のためのがん対策

in Shizuoka 2003

平成16年3月20日(土)

東レ総合研修センター 大研修室

主催：静岡県・静岡県立静岡がんセンター

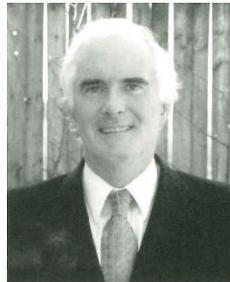
講師プロフィール／講演要旨

特別講演I

オーストラリアにおけるがん対策：ヴィクトリア州のケース

講 師

ロバート C. バートン (国立がん対策推進機構 名誉顧問：オーストラリア)



略歴

1981	ハーバード大学(アメリカ)外科学助教授 マサチューセッツ総合病院(アメリカ)外科学助教授
1981～1995	ニューカッスル大学外科学教授 (Foundation Professor)
1992～1993	国際がん研究機関(フランス、リヨン) 客員研究員
1995～2002	ヴィクトリア州がん協会(対がん協会)理事
1996	モナッシュ大学外科学教授 メルボルン大学公衆衛生学教授 (1996年～2003年)
2004	メルボルン大学外科学教授 オーストラリア国立がん対策推進機構 名誉顧問 国際対癌連合戦略リーダー オーストラリア政府保健・高齢者担当省 がん戦略グループ長

オーストラリア初の国立がん対策推進計画(NCCP)の発展は、1997年、中央政府(または連邦政府)保健省とがん対策非政府組織では最大のオーストラリアがん協会との協定による、国立がん対策推進機構(NCCI)の発足に始まった。NCCPは36の全国調査会ならびに各州を拠点とする研究会からなり、がん対策専門家とがん患者1500余名のデータから『Priorities for Action in Cancer Control 2001-2003(PACC)』をまとめた。PACCには、政府／非政府によるがん予防から軽減までのがん対策活動13種について、その優先順位を特定している。2004年以降の第2次NCCPはサービス改善フレームワーク(SIF)プランであり、予防策から軽減策に及ぶ連続するがん対策運用における19のサービス介入点を特定している。SIFは特にシステムの改善、たとえば健康的なライフスタイルのための健康増進やがん患者のコーディネート・ケア等を目標とする。ヴィクトリア州(人口480万人)は、2003年にSIF方式のCCPを最初に完成させた。ヴィクトリア州におけるフレームワークは、科学的根拠に基づく一連の医療標準を中心としている。この独特な医療標準には次の4つの対象領域がある：発病、診断、治療および医療の継続と転帰評価；多岐の専門分野による共同的医療の供給；サービス間の連携に関する問題；サービスの認定資格。

特別講演II

がん研究者兼がんの患者

講 師

杉村 隆 (国立がんセンター 名誉総長)



略歴

1926	生まれ
1949	東京大学医学部医学科卒業
1962	国立がんセンター研究生化学部 部長
1974	国立がんセンター研究所 所長
1984	国立がんセンター 総長
1992	国立がんセンター 名誉総長
2001	日本学士院 第二部 部長

がんはDNAの病気である。この主題で、平成9年に日本国際賞を受賞した。

受賞がきっかけで、偶然に、モンシロチョウから殺がん細胞性ペプチドを分離した。

一年前、無症状で検診を受け、胃上部の早期胃がんが発見された。

胃の全摘、術後十一泊で退院した。

現在、もとの八割の生活をしている。その感想を述べる。

講演 1 わが国におけるがん予防の可能性

講 師 山口 直人（東京女子医科大学教授）



略歴

1978	慶應義塾大学医学部卒
1987	産業医科大学環境疫学教室助教授
1990	国立がんセンター研究所疫学部室長
1996	国立がんセンター研究所がん情報研究部長
2002	東京女子医科大学衛生学公衆衛生学教室教授

講演 3 抗がん剤開発の現状と問題

講 師 西村 遼（万有製薬つくば研究所名誉所長）



略歴

1931	生まれ
1960	東京大学理学部化学系大学院生物化学博士課程修了
1965	(財)癌研究会癌研究所研究員、米国留学
1992	国立がんセンター研究所
1999	万有製薬つくば研究所所長
	同研究所名誉所長

学士院賞、恩賜賞（1988年）、高松宮妃癌研究基金學術賞（1988）等を受賞： 米国芸術・科学アカデミー外国人名譽会員、米国分子生物・生化学会外国人名譽会員、日本癌学会、日本生化学会、日本化学会名譽会員

がん予防は、一次予防、二次予防、そして三次予防を総合した包括的な取り組みが必要である。一次予防として生活習慣へのアプローチ、薬剤の応用が検討され、二次予防としてがん検診の精度改善に向けた研究が進みつつあるが、現時点で実施可能な予防対策を実現した場合に、がん罹患、がん死亡をどこまで減少させることができるか、マクロな視点から分析を行い、わが国におけるがん予防の可能性と限界を数理疫学的に検討する。

現在広く用いられている制がん剤のほとんどは、細胞増殖の過程に働いて、がんを殺す、いわゆる "cytotoxic agent" である。正常組織の細胞も増殖するので、正常細胞には何ら作用せず、がん細胞だけを殺すことは大変に難しい。一方最近は癌の発生と進展のメカニズムが分子レベルで解明されつつある。これらの情報に基づいて、がん細胞にだけ特異的に作用する制がん剤の開発が世界的に試みられており、すでにその幾つかは市販されるようになり、有効性が示されるようになっている。グリベッグ、ハーセプチノン、イレッサ、ベルケードで代表される腫瘍特異 "growth modulating agent" である。これらの新しいタイプの制がん剤は、既存の制がん剤が効かなかったがんにも有効性が見られ、多大の注目を集めている。その意味では一步の前進であるが、一方初め期待したような夢の新薬でないことも確かである。がんは多種多様の遺伝子の変化によって生じ、しかもそれらの変化はそれぞれの癌で異なるので、特定の標的を狙った新しいタイプの制がん剤で、全ての癌を征圧することは恐らく難しい。これからはがん細胞の遺伝子情報を解析して、制がん剤の効果をあらかじめ予測するテーマーライドの治療が重要になってくる所以である。1つの制がん剤の開発には、10年の歳月と500～1000億の費用がかかるといわれている。どこに問題があるのか？制がん剤の開発を今後どのようにしたらよいか？最近の進歩した開発手法を紹介すると共に、私なりの私見を述べたい。

講演 2 わが国におけるがん検診の現状

講 師 祖父江 友孝（国立がんセンター がん予防・検診研究センター情報研究部長）



略歴	
1959	生まれ
1983	大阪大学医学部卒業
1983～1994	大阪府立成人病センター調査部勤務
1986～1987	米国ジョンズ Hopkins 大学
1994～2002	公衆衛生学部公衆衛生修士課程修了
2002～2003	国立がんセンター研究所勤務
2003～現在	がん情報研究部がん発生情報研究室長 がん情報研究部長 がん予防・検診研究センター情報研究部長

がん検診を公衆衛生施策として行う目標は、対象集団におけるがん死亡を減少させることにある。これを実現するためには、どのがん検診が有効であるかを判断し（がん検診アセスメント）、有効ながん検診を正しく実施すること（がん検診実施マネジメント）が必要である。がん検診アセスメントについては、わが国においても症例対照研究を中心とする科学的証拠が蓄積されてきたが、その成果の周知が十分ではない。また、がん検診実施マネジメントについては、受診率モニタリング、受診率向上対策、精度管理など、改善すべき点が山積している。がん死亡を短期的に激減させるには、科学的証拠に基づいたがん検診の実施を徹底させることが重要である。

講演 5 がん対策の費用対効果

講 師 濃沼 信夫（東北大学大学院医学系研究科教授）



略歴	
1975	東北大学医学部卒業
1978	武藏野赤十字病院
1981	フランス政府給費留学
1988	厚生省
1989	WHO本部事務局（ジュネーブ）
1990	国立がんセンター
	東北大学医学部教授

わが国では、がんは罹患数・生存数・死亡数とも増加傾向にあり、長足の医療技術の進歩に伴って、がん医療には今後多くの資源が消費されることが予想される。一方、少子高齢化の進行や経済の長期低迷等から医療財源は逼迫しており、がん医療への大きな資源投入が正当化されるための有効性の根拠が求められている。21世紀に入り、質の高い効率的で安全な医療を実践することは一層強く要請されており、がん医療で何が適切、有益であり、何が根拠に薄く、費用対効果で劣るかを明らかにすることは極めて重要となっている。医療経済面からみたわが国のがん医療について鳥瞰する。

講演 4

当日配付

序 言

静岡県では、平成6年度以降、「静岡アジアがん会議」を開催し、その成果を「静岡がんセンター計画」に取り入れてきた。その静岡がんセンターの開設を契機に、本年度からは「静岡がん会議」として、富士山麓ファルマバレー構想との連携を図りながら、静岡県民のがん対策に役立つ活動を開始している。平成15年度、静岡県では「がん対策委員会」が発足した。そこで、本年度は、一般県民、市町村保健担当職員、医療関係者を対象に、静岡県民のがん死亡の低減を目指し、「県民のがん対策」をテーマとして討議することとした。出席者の活発な議論を期待したい。



山 口 建

静岡県立 静岡がんセンター総長

プログラム

日英通訳あり

静岡がん会議2003

平成16年3月20日(土) 10:00~17:35

東レ総合研修センター 大研修室

テーマ：県民のためのがん対策

10:00	開会挨拶	鈴木 雅近（静岡県副知事）
10:10	講 演 1	わが国におけるがん予防の可能性 山口 直人（東京女子医科大学教授）
10:55	講 演 2	わが国におけるがん検診の現状 祖父江 友孝（国立がんセンター がん予防・検診研究センター 情報研究部長）
11:40	特別講演Ⅰ	オーストラリアにおけるがん対策：ヴィクトリア州のケース ロバート C. バートン（国立がん対策推進機構名誉顧問：オーストラリア）
13:00	休 憩	（昼 食）
14:00	講 演 3	抗がん剤開発の現状と問題 西村 還（万有製薬つくば研究所名誉所長）
14:45	講 演 4	交渉中
15:30	休 憩	
15:45	講 演 5	がん対策の費用対効果 濃沼 信夫（東北大学大学院医学系研究科教授）
16:30	特別講演Ⅱ	がん研究者兼がんの患者 杉村 隆（国立がんセンター名誉総長）
17:30	閉会挨拶	山口 建（静岡がんセンター総長）

**静岡がん会議
2003**

富国有徳
しづおかの挑戦。

静岡県